

<39> 指揮者エドトンのために。ダビデの賛歌。

39:1 私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないように。口に口輪をはめておこう。悪しき者が私の前にいる間は。

39:2 私はひたすら黙っていた。良いことにさえ沈黙した。そのため私の痛みは激しくなった。

39:3 心は私のうちで熱くなりうめきとともに火が燃え上がった。そこで私は自分の舌で言った。

39:4 【主】よお知らせください。私の終わり私の年齢がどれだけなのか。私がいかにいかにいかを知ることができるように。

39:5 ご覧ください。あなたは私の日数を手帳ほどにされました。あなたの御前では私の一生はないも同然です。人はみなしっかり立ってはいても実に空しいかぎりです。セラ

39:6 まことに人は幻のように歩き回りまことに空しく立ち騒ぎます。人は蓄えるがだれのものになるのか知りません。

39:7 主よ今私は何を待ち望みましょう。私の望みそれはあなたです。

39:8 私のすべての背きから私を助け出してください。私を愚か者のそしりの的としないでください。

39:9 私は黙し口を開きません。あなたがそうなさったからです。

39:10 どうかあなたのむちを取り去ってください。あなたの手に打たれて私は衰え果てました。

39:11 あなたは不義を責めて人を懲らしめシミが食うように人の欲するものをなくされます。実に人はみな空しいものです。セラ

39:12 【主】よ私の祈りを聞いてください。助けを求める叫びに耳を傾けてください。私の涙に黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人すべての先祖のように寄留の者なのです。

39:13 私を見つめないでください。私が朗らかにになれるようにしてください。私が去っていなくなる前に。

詩人は罪ゆえの苦しみを、神様から与えられていたと思われます。それゆえ神様への不平不満を言わないようにと、「口に口輪をはめておこう。」と思っていたのでしょうか。しかしそれができないほどの苦しみでした。

その中で人の命のはかなさや無力、無常感をまのあたりにするのです。しかしそれこそが神様の希望の入り口でした。後半にこの詩人は神様への信頼を切々と述べています。

このように神様への信仰は、順境のときよりもむしろ逆境のときに強くなるものです。その心構えをしつつ、主に依り頼みましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

